

認知症を患う高齢者が徘徊（はいかい）し行方不明になる事例が増えるなか、スマートフォン（スマホ）を介し迅速な保護を支援するシステムが注目されている。東邦ホールディングス（HD）が提供する「どこシル伝言板」。2018年度は新たに30ほどの自治体が導入する見通し。累計で約50市町に広がる。着衣などにシールを貼るだけという手軽さや低コストで支持を集め、不安を抱える家族の頼りになりそうだ。

どこシル伝言板は名前の通り、インターネット上に設けた仮想伝言板のようなシステム。自治体が東邦HDと契約し、まず患者の情報をケアマネジャーや家族に登録してもらう。ニックネームや性別、体の特徴などを入力。「ぬいぐるみは



本人にとって子どものような存在なので大切に扱ってほしい」といった注意事項も書き込める。家族には入力した情報にアクセスできるQRコードを印刷したシールを渡し、上着やつえなど患者が持ち歩く物に貼ってもらう。シールには市章や自治体の名称が記されているが、一見用途は分からない。東邦HD地域医療連携室次長で開発に携わってきた日高立郎氏は「本人を見れば自治体職員などと違っていると分かる。どこか違和感

QR読み取り家族へ通知

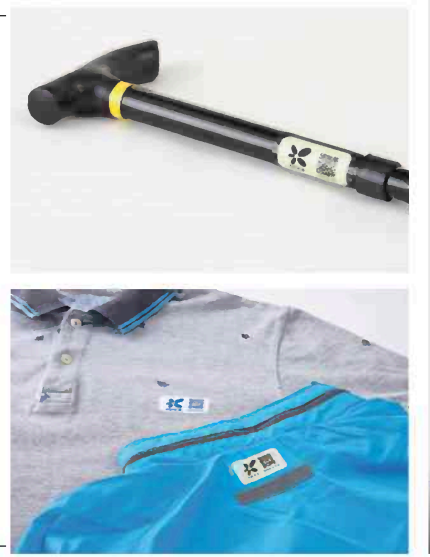
東邦HD、徘徊高齢者の保護支援

のあるデザインで、声かけのきっかけになることを狙った」と説明する。

徘徊している高齢者に気づいた人がスマホでQRコードを読み取ると、伝言板に接続される。発見場所や健康状態などを入力、送信すると、家族に「発見」の通知と伝言板のURLが記載されたメールが届く。

家族が伝言板にアクセスすると、発見者と文字でやり取りできる。「匿名で情報交換できるため、両者とも個人情報を開示する不安を和らげられる」。発見者が警察など公的機関の場合は電話番号を入力でき、電話で話すことも可能だ。

自治体と契約することで自治体も情報を把握でき、つえなど普段身につけるものにシールを貼り、発見者にQRコードを通じたアクセスを促す



つえなど普段身につけるものにシールを貼り、発見者にQRコードを通じたアクセスを促す

濯を勘案して2年ほど使用でき、全地球測位システム（GPS）による位置情報サービスなどより割安だ。開発のきっかけは15年に発生した事件。14年8月、東京都中野区の公園で高齢の男性が死亡しているのが見つかった。発見2日前、路上に倒れていた男性に警察官が接触していたが、会話の内容から保護は不要と判断していた。男性は神奈川県内の福祉施設から行方不明になったという認識。家族から行方不明者届が出たが情報が結びつかず、15年2月まで身元が分からなかった。「警察官以外にも色々な人が接していたはずだが、亡くなってしまった。誰でも簡単に手を差し伸べられる仕組みがあれば避けられた事態ではないか」（日高）

（秦野貫）